

影山先生との思い出

足利市教育委員会
文化振興担当 主事
文化課

波 多 香 織

影山先生と出会った（正確には、初めて互いを認識した）のは、二〇一六年の五月、私が大学3年生になってからだった。それ以前にも、授業やガイダンスでお顔は知っていたが、私は一介の学生に過ぎず、私のなかの影山先生も、国文学科教授の一人に過ぎなかった。

当時、私はゼミの選択に迷っていた。その候補のひとつが中国古典学、つまり影山先生のゼミだった。そのことを周囲に話すと、近世文学の佐藤先生が、「とにかく直接相談するのが一番です。土曜日のお昼に、急いで影山先生の研究室へ行ってみなさい」とおっしゃる。卒論ゼミ希望届の提出期限が週明けに迫っていた。佐藤先生の言葉に背中を押され、アポイントメントも取らずに先生の研究室のある13階へ行くエレベーターに乗り込んだ。ドアが開き、さ

あ降りようと視線を前に向けると、紛れもない、影山先生が立っていらっしゃった。私は「あつ」と口が開いたまま、突然のことに言葉が出てこない。先生は、固まったままの私を見て、「僕に用か」とおっしゃった。頷くと、「これから外へ出るんだ。昼飯食べながらでもいいか。」そうして、近所のお店に入った。私はその日の服装まで鮮明に記憶しているが、肝心の、何を話しよう相談したのかほとんど覚えていない。ただ、先生が「いつもの」と注文し、ホットドックとコーヒーを召し上がり、私がロールパンサンドとレモンスカッシュをご馳走になったことだけはきつと忘れることはないだろう。先生は「僕は、来るものは拒まず、去るものは追わない。来てくれるのなら嬉しいが、今日食事をしたからといって、気を遣うことはない」と、帰り道で別

れるまで繰り返しておっしゃった。私は学校へ戻ると、ゼミ希望届の第一希望欄に影山ゼミと書いて提出した（不思議なことに、先生とお話ししたいと思つておられるときに思わぬ場所でお会いすることは、これ以降も度々あった）。

「来るものは拒まず、去るものは追わず」は先生の学生に対する方針のようだったが、教え子からは慕われており、月に何度かOGのかたがたが会いにいらしていた。中には影山ゼミでなかったかたもいらつしやうだったが、そのかたの在学当時のことは「あまり覚えていないんだよ」と言いつつ、訪ねてきた様子について少しはにかみながら話される先生は、いつも嬉しそつた。

ゼミの配属が正式に決まり、さあ卒論テーマを考え始めようとなつた3年生の冬、研究室では影山先生の特別講義が開かれた。受講者は私と朋友のMとKだ。先生にとつての「常識」を私たちがあまりに知らなかつたためだ。テキストは『論語義疏』。期間は2、3か月ほどだつたらうか。読めなかつたり、言葉の意味や使い方を知らなかつたりすると、「こんなことも知らないのか!」と目を丸くして驚かれ、私たちは顔を見合せて縮こまる。すると、「しようがねえなあ」といつも笑つて説明してくださつた。その時間が新鮮で楽しく、小さな質問もたくさんした。普段使われないアタマをへとへとになるまで使つたのだから、それ

に付き合つてくださった先生は、さぞかし大変だつただらう。

4年生になると、影山先生以外の授業はほとんど無く、就職活動や卒業論文のために毎日大学の図書館に通つていた。漢文で読めない部分があれば、しるしをつけて除けておく。そうして溜めていた疑問点を抱えて、研究室の戸を叩いた。先生の研究室はいつもコーヒーと紙の香りがし、用意していた疑問点が数分で解消しても、居心地が良いあまり、そのままテーブルの隅をお借りすることもしばしばあつた。私がプレッシャーとストレスによつて参つていたので、先生は察していらつしやうたのだらう。先生との何気ないやり取りによつて、私の精神は均衡を保たれていた。実は、もし私が就職できなければ、先生は仮措置として、ご自分の研究の手伝いをさせてやつてもよいとお考えだつたようだ。このことは、全てが終わつて結果が決まつたら、笑い話のように呟かれたひとことから知つた。責任感があるというか、懐が深いというか、とにかく優しいのだ。先生がかつて厳しい指導で「鬼の影山」と学生たちから恐れられていたことは、エピソードを交えつつ先輩などから何度か耳にしたことがあつたが、私知つて居るのは既に「仏の影山」になつた先生だつた。そのため、思い浮かぶ先生のお顔はニコニコしているほうが多い。しかし、先

生の持つ威厳と風格は、私は仏でも不動明王に近いだろう。その眉間に皺が寄せられるのが怖く、私と朋友たちは事前勉強を欠かさなかった。それが結果的に成長に繋がったわけだ。そして、「きみたちに、僕の知っていることを全て教える」と、漢籍や中国語のみならず能や謡についてもお話ししていただいたのは、かけがえない財産となった。もちろん先生が何十年と積み重ねた膨大な知識を、短い学生生活のうちに吸収することはできなかった。そこで私は今後も引き続き先生のお持ちになっているすべての知識を、先生のライフワークの一つとして伝えていただきたいと勝手に考えている。事あるごとに「遠慮するな」とおっしゃる先生ならば、これくらい厚かましくても許して下さるだろう。私は先生にとって最後から「2番目」のゼミ生として卒業したが、広い意味で先生は私のことを「最後の」と言われる。それが嬉しく、名誉であるのと同時に、「最後」という言葉がいつも切なく耳に残る。

余談だが、大学へ入学が決まった頃、何の気なしに足利学校を参観しに行った。その際、影山先生が足利学校で『論語』に関するご講演をするという旨のポスターが壁に貼られていた。よく分からないがすごい先生が大学にいる、という感想だけ抱いてその場を立ち去った。まさか自分が数年後には先生のもとで学び、卒業後足利市で働くことにな

るとは思わなかった。しかし、この一瞬で、先生のお名前と「論語」の二文字を今日に至るまで記憶していたのは、すべてが必然だったと思わずにいられない。

(平成29年度 卒業生)



足利学校にて。向って右端が波多。